

迷うことで助かった 終戦の頃のはなし

科学技術翻訳士 福井 巖 (徳和瀬出身)

ああいう光景を地獄というのだろう。5歳のとき終戦を迎えた西阿木名での空襲の体験は67年経った今でもありありと蘇ってくる。父が西阿木名小学校に赴任していた関係で、一家5人で長倉さんと言う方の家を借りて住んでいた。家の東に水田があり、その北側に兄の同級生のケイスケ兄さん、そのお姉さんのカズコさん(当時たしか12歳)がお母さんと住んでおられた。零戦が今にも落ちそうにカタカタと音をたてて行くはるか上をB29などがシューンという金属音の高速で通り過ぎる姿や、村のお母さん達が山中で木に縛ったわら人形を竹やりで突いている姿などを見るにつけ、5歳の子供にも日本が劣位にあり、もっと強くなければという位の想像はできた。夜、赤々と見える浅間の飛行場の火事などもあったが、大人に守られているというところで、あまり不安は感じなかった。

た。

◇

終戦も近いその日、せみが鳴く明るい昼時(と思うが、朝だったかも)、私達は父母と姉の4人で食事をして

いた。兄は隣家に遊びに行っていた。突如、南の方角から近づくとアメリカの爆撃機の音。僕は汁茶碗と箸を持ってまま立ち上がった。どこに逃げようかと4人は迷った。石垣を越えて東に行けば、山に逃げ込めるし、

台所から北に行けば防空壕がある。この迷いが4人の命を救ってくれた。この迷いは、どっちにしようかと迷う2〜3秒の間に、耳が裂けるかと思っ

た。その直後の爆風で「いろいろ」の灰が家中に舞い上がり、一瞬に家の中が真っ暗になってしまった。防空壕の真上に焼夷弾が落ちたのだった。

炸裂した焼夷弾の破片は、家で縫

物をしていたカズコさんの心臓を直撃し庭で遊んでいた兄の額やミカンの木には飛び散った血や折れた針の付いた肉片がこびりつき、家の中は血の海に。裏畑で仕事をしていたカズコさんのお母さんは爆撃機の音で木の陰に身を潜めていたが、爆弾落下のあと前庭で男の子たちの声はするもの、娘の声がしない。おそろおそろ家に入って、血にまみって即死状態の変わり果てたむすめの姿に立ちつくしたという惨劇だった。

永い人生で、迷わずストレートに事が達成されていけばこれに越したことはないが、今の生かされている幸せを思うと、あの時の迷いのお陰と思わざるを得ない。人の進退には四つの方向と五つの動き(前・後・左・右それに速度ゼロの動き)とどまっ

まっているというだけで、相手が動いて変わった展開になる(一があるという。ときに、速度をゼロにした動きも良いのかも知れない。

前前述のカズコさんのことは、大人たちが語ってくれた後日談によるものだが、鮮烈に思い出される。カズコさんは惨劇の明け方「カズコおいでー」と、前に亡くなっていた祖

母の呼ぶ夢で目を覚まし、お母さんにその事を告げた。故人が夢に出てくるのは先祖からの「物知らせ」といって「注意しなさい」と言われるから、お母さんもお厨子に酒を上げて先祖の加護を祈ったという。焼夷弾が落ちたあと外から家に居るはずの娘の名を呼んだのは結局、お母さんだったらしいが、5歳のときの記憶だから少し曖昧かも知れない。



正夢が現実になる経験は、大なり小なり人にはある。東京工大で物理学を教えていたある有名な先生が、

50年程前に素粒子の一つである光子(フォトン)などの類で、人間には将来を見通したり予言したりできる「幽子」でも言える微粒子が備わっているのではないかと、いつか、新聞に書いておられたことがある。

こういう未来予測の可能な素粒子が発見されたら、人間の不幸も経済的不況もなくなるに違いないが...

将来の不幸を避ける方策が、どうも心の世界に潜んでいるような気がしてならない。